The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞Д．ナツァグドルジ「青の風景」
Author(s)	Д., ナツァグドルジ; 織田, 幸彦
Citation	モンゴル研究. 2024, 33, p. 47-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102411
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《翻　訳》

青の風景

Д．ナツァグドルジ
（訳）　織田　幸彦

青々とした景色　ほうほう
青葉と花の山だよ　ほうほう
あなたの勇気漲れば　ほうほう
遊べよ山で　ほうほう

彩なす景色　ほうほう
アップルの山だよ　ほうほう
愛する二人の子を連れて　ほうほう
安住できる山だよ　ほうほう

清水は冷泉だよ　ほうほう
水流、北の斜面から　ほうほう
獅子と虎の子　ほうほう
十頭、二十頭、群れになる　ほうほう

松や楡の木　ほうほう
木の葉に連られて揺れる　ほうほう
鷹のひな鳥　ほうほう
湿地の上で輪を書くよ　ほうほう

（次頁につづく）

ヤマナラシ、楡の木　ほうほう
山沿いの岩場に　ほうほう
隼のひな鳥　ほうほう
愛らしくさえずる　ほうほう

彼方の三本の楡　ほうほう
黄金よりも輝いて　ほうほう
吾子よ可愛や　ほうほう
遊んではしゃいで愉しそう　ほうほう

原題　Цэнхэрлэн харагдах (Д.Нацагдорж) 1923年

「・・・浦の苫屋の秋の夕暮れ」感傷的な若者T君は秋の暮色や落陽の光芒にばかり気を取られていました。ある夏の日、「万葉の旅」を鞄に入れて奈良の橿原神宮のあたりを独りで歩いていると、万葉の古人が青年に囁きます。「どうか私のことを思い出して」「お前に話すことなどない」「野原の向こうに私の想い人がいる」「ほら、雄鹿が恋を歌っている」・・ふと見上げると、社殿の背後に雲が湧き出たような畝傍山の姿がありました。この時T君は初めて、山野の生命力というものに心を奪われました。

訳者所蔵のЦ.Дамдинсүрен編集による選集（1961年刊）の冒頭に掲載、色彩に溢れ、歌うような音感です。歌劇「ウシャンダル王」が 1920 年代に作曲され、モンゴルで上演されました。本作はここで初めて劇中歌として披露されました。その後原文の再発掘や流行歌の詞曲を経て、巷間に流布しております。本編は、ほぼ頭韻が踏んでありますので、固有名詞の多い4-5連以外はなるべく、韻律を施しました。

（おだ　さちひこ）